

石原元都知事の右腕が激白！ 『「水面下」の内幕を 全部話しましょう』

政治ジャーナリスト 鈴木哲夫



「屈辱を晴らす」と息巻く石原氏だが（東京都）

「返り血浴びるかもしれない」

2月に入り石原慎太郎元東京都知事が積極的に発言し始めた。築地市場の豊洲新市場への移転問題について週刊誌で当時の様子を語り、記者会見や連日自宅を取り囲むマスコミ関係者らに言葉を発した。

「逃げているとか隠れているとか言われた屈辱を晴らしたい」

石原氏はそう語るが、そもそも「屈辱」といった話でもないだろう。豊洲への移転を巡って、不透明な土地取得交渉や、安全対策の盛り土が充分に行なわれていなかったことなど、当時知事として立場上の責任は絶対

に免れない。説明責任を果たすのは、「晴らす」ではなく当たり前の話ではないのか。

石原氏が発言し始めた理由については、石原氏に近い関係者は言う。

「石原さんの精神状態は、感情的には『いい加減して欲しい』と沸点にきている。小池百合子知事に標的にされ、マスコミにも責任を散々書かれ、連日自宅前に報道陣が詰めかけ、一步玄関を出ると質問攻めの毎日が続いています。『俺にも言い分はある』とそういうことでしょう」

だが一方で、発言することについて心配する面がむしろ大きいという。「喋って済むかと言うと全く逆でしょう。恐らく弁護士らと会見内容を精査して臨んだとしても、自分は悪くないと主張すれば逆に世論は批判的になる。さらに喋ることで次の疑念が沸く。じゃあ、次は百条委員会となると、話に矛盾が生じて偽証罪などにもつながる。喋ることで取まるのではなくリスクが大きいのです」（同周辺）

結局、石原氏は3月3日に記者会

見。しかし、中身は「自分ひとりの責任ではない」と逃げの印象を残し、周辺の「墓穴を掘ってしまった」という心配は的中してしまった。こうした石原氏の高ぶりは、「会見をやる」「やらない」「議会の喚問などどこへでも出る」と連日の発言となり、そんな石原氏をマスコミが取り囲んで報道し、世論の注目をさらに高めて行くことになってしまった。その結果が、都議会の百条委員会設置だ。

3月22日、都議会の主な4会派が豊洲市場を巡る問題を審議する調査特別委員会、いわゆる百条委員会の設置を提案し可決されたのだが、これは、石原氏が結果的に世論を喚起してしまつたために、「議会も百条委で取り組むべき」という声が高まってきたというのが真相だ。

「作りたくなかったが、仕方ないところまで来た」

そう話すのは自民党のベテラン都議だ。百条委員会というのは、その「百条」の名のとおり、地方自治法100条に基づいて地方議会が設置

する調査特別委員会。自治体で起きた疑惑などの真相を究明するために設置できる。関係者を呼んで証人喚問し、記録なども提出させるという強制力や調査権限を持つ。さらに、正当な理由のない証言拒否や虚偽の証言をした場合は禁錮刑や罰金刑などの罰則もあり、地方議会では百条委設置は疑惑解明の最大のヤマでもある。

自民ベテランが続ける。

「うちは豊洲移転を推進した。百条委が進むにつれ返り血を浴びるかもしれない。例えば豊洲の土地契約を最終的に認めた際に、議会の多数派工作をしたのはうちの幹部だ。そんな人まで証人にとったことになるかもしれない。しかし、今都議選運動で選挙区を回ると有権者からの突き上げが凄い。そして自民党の支援者までがこのところの石原さんのニュースを見て、きちんと（百条委で）やるべきだと。夏の都議選を考えるとやらざるを得なくなつたということだ」

また都議会の公明党も百条委設置には消極的だった。

「百条委は事前の調査など時間手間もとてもかかり、今は都議選対

応でそれどころではない。それに、百条委でろくに追及ができないということになれば、それは逆に批判に変わり都議選には悪影響になってしまふ。どう転んでも都議選にリスクがあるが、自民党さんと同じように、うちも支援者、特に女性の支援者が百条委徹底的にやれと言っています」（公明党都議）

「高みの見物」小池氏の目算

スケジュールについては、百条委設置が決まった2月22日にさつそく百条委で話し合われた。設置を主張してきた共産党などは19人の召喚リストを出したが、具体的には決まらず、一旦先送り。その後、石原氏らの喚問など大筋が決まった。

共産党都議団幹部は言う。

「石原氏や副知事として土地交渉に当たった側近の浜渦武生氏などは召喚するのは当然。しかし、自民党などはその他に誰を呼ぶかで自分達にも影響が及ぶことになる。百条委はいつまでといった期間の制限はありませんが、都議選くらいまで引っ張るようなことになれば、徹底的に追及姿勢を見せるうち（共産党）は有利、自民党や公明党にはマイナ

スになるから、さすがに自民党などはそこまでは百条委を終わらせたい。誰をどの範囲でいつまでに呼んでどんな決着とするのかなど、百条委を作ったはいがどう運営するか、各党、特に自公の思惑は複雑で難しい対応になるでしょう。都民が望んでいるようなすっきりした解明となるかは不透明です」

だが、こうした石原氏や都議会の混乱ぶりを、余裕を持って眺めているのは小池百合子都知事だ。

「屈辱とかそういう問題ではなく、都民はファクトを知りたい」（2月16日記者会見）

「百条委員会について、これからどんなやりとりが行なわれるか見守りたい」（2月22日東京都議会初日ぶら下がり取材）

「（石原氏と会うかどうかについて）議会の方でお聞きになるので、お任せしたい」（同）

豊洲新市場への移転問題で淡々と語っている小池氏。どこかこの問題に距離を置いた言葉の響きだ。言い換えれば「高みの見物」というニュアンスとも受け取れる。

小池氏を支持する都議会党派幹部は言う。

「最初に豊洲移転を延期して安全性の再調査で火をつけたのは小池知事だが、ここへ来てついに石原さんや都議会が晒される流れになった」つまり、今後小池氏が暫く動かなかつても、都議会に百条委員会ができ、石原氏が答弁次第でさらに火だるまになる可能性もある。また、都議会自民党などの追及が甘かったら、それは逆に自民党の失点にもなる。

小池氏が、対立軸のターゲットとして掲げた都議会自民党のドン・内田茂都議も、豊洲移転承認の議会可決の際に多数派工作をしたとされ、百条委に呼ばれる可能性も出てくる。

結局相対的にこの問題に果敢に取り組んでいる小池氏の存在感は強まり、来たる今夏の都議選でも小池氏の「都民ファーストの会」の勝利にもつながると言うカラクリだ。

自民党は今後の百条への取り組みについて「半ば自縄自縛（都議団幹部）と対応の難しさを白状する。小池氏は眺めていればいい。「したたかな都議会制覇シナリオ」（前出小池支持会派幹部）が奏功していると言える。

さて、百条委員会などでの追及もさることながら、このほど、豊洲移

転問題のキーマンの1人である、石原都政時代の副知事で石原氏の側近中の側近・浜渦武生氏に、当時の様子を単独で聞くことができた。

浜渦氏は、2000年7月～05年6月に副知事を務めたが、築地市場の移転先となった江東区豊洲地区の東京ガス跡地の土地買収交渉に当たった。

これまで、マスコミには露出せず、都や議会に出向いて真実を語るというが、「いろんな報道を見て、関係者が喋っている内容を聞いても、核心に触れていない」として、このままでは問題の本質や解決策までも出口を失うと、このほどインタビューに答えてくれた。

最初に整理しておきたいが、豊洲問題は時期的に見ても3段階あると私は思う。第1段階は、都庁内部で移転先として豊洲に絞られた時期で、これは石原氏が知事に就任する前のこと。第2段階は最終的に豊洲に決まり、東京ガスと土地交渉や合意に至った時期。そして第3段階はその後汚染が発覚しながらも、そのまま最終契約まで進んだ時期。

浜渦氏はこのうちの第2段階の、まさに中心人物だ。

「役人では無理。お前がやれ」

Q：浜渦さんが担当するようになった経緯は？

浜渦：豊洲の東京ガスの跡地に築地市場を移転しようという土地の交渉は、石原知事就任前の1998年頃から始まっていました。都側の担当副知事だったのは福永正通さん。ところが、交渉がうまく行かないということだったので。

浜渦氏は、石原知事が都庁内の幹部や都議会対策などガバナンスのために副知事に登用した。浜渦氏は人事や天下りにも手を突っ込み、大胆な予算の組み換えなどで週2～3度しか登庁しない石原氏に代わり都庁を統治した。ただ、その剛腕ぶりについてやり過ぎと批判の声が、特に既得権を守りたい都職員や都議らから上がった。

浜渦：石原知事と福永さん、それに知事本局の何人か、そこに私も入って協議した。その結果石原さんが『もう役人では交渉など無理。浜渦、お前がやれ』と。そこから、土地の交渉を私がやることになったんです。

Q：東京ガスの跡地が汚染されていることはその時点で知っていたのか。

浜渦：もちろん知っていました。東京ガス自体が、地下は汚れているとただ数字で具体的にどれだけ汚れているかという話にまではならなかったのです。当時は、コンクリートで単なる箱のようなものではなく、がっちり流し込んで固めて地面を嵩上げするぐらいのことをやって、その上に建物を建てれば、地下水とは完全に分断できてそれで充分という考えでした。そうした安全対策はオープンで議論されていたし、皆も納得していました。私は用心に越したことはない、さらにシートも敷き詰めれば良いと言ったぐらいです。

Q：地下水とは分断できたとしても、他に汚染の疑いなど全くない所に移せたのではないか。

浜渦：当時は、豊洲以外にも4つくらい他の候補地も挙がっていました。でも移転するには条件がありました。40ha規模のまとまった広さ、交通の便、築地の時の顧客に近い場所、そして海に面していること。それらを満たすのが豊洲だったということです。私自身は、圏央道の建設に合わせて十分な広さが確保できる多摩地区に持っていったらどうかという案も出して、皆で検討しました。

しかし、顧客の面などで築地市場の関係者が反対で、海も離れているということで、最終的には無理だということになりました。

このようにして、東京ガスとの土地交渉に入った浜渦氏だが、同社はこの跡地にすでに広大なウォーターフロント計画を進めており、マンションやショッピングモール、大学誘致などが計画されていた。社内では経営サイドがこれを正式に決定し、株主なども了解していた。市場の移転先として売り渡すことには抵抗があったのだ。

ここで、「水面下」という当時のキーワードが出てくる。これは共産党都議団が、当時の浜渦氏と東京ガスによる交渉についての都職員のメモを手して公表したものが、そこに、浜渦氏と東京ガスの間で「そのことは水面下でやりましょう」と記されていたのだ。

水面下というからには売却に難色を示す東京ガスと何かしらの裏取引や、売買代金の上乗せなどもあったのではないかと疑惑が、都議会やマスコミの間に広がったのである。これについて浜渦氏は真相を次のように明かした。

浜鍋「『水面下』という中身を総て話しましょう。東京ガスは再開発計画を経営決定済みだったので、もちろん、豊洲の土地売却に難色を示していました。当たり前ですが、今後交渉するとして、決定事項を蒸し返されるのは株主へ説明も大変だし困るということでした。そこで、むしろ東京ガス側が株主総会対策なども考えて、『水面下』での交渉を望んだのです。前任の交渉担当の福水副知事(当時)の時からこの『水面下』という言葉を使うようになっていたんです。

Q…具体的には何があったのか。
 浜鍋…副知事に就任して10月に東京ガスの本社に行きました。向こうはズバリと役員が並んでいて、私はこの中の誰が実質的な決定権を持っていて、交渉の相手なんだろうかと思いましたが、その後、その中の1人のE氏が力があるということが分かりました。私が始まりましたのは、去年亡くなられた自民党の佐藤信二議員。通産大臣や運輸大臣もされて、私は選挙も手伝ったり親しかったのです。

その佐藤さんの奥様が東京ガスの社長のお嬢さんだったこともあって、

私は佐藤さんに、東京ガスにお願いしてほしいと頼みました。その後東京ガスの幹部と一緒に現地に視察に行っただんですが、その時に「公共性という点では御社も東京都も同じ。ここは協力してくれないか」と訴えて、東京ガス側もそこまで言うなら仕方ないという流れになったのです。その場で現場を見ながら決めたのが、お金の分担だったんです。

当時、東京ガスは自身の予算で現場の護岸工事を約1000億円かけ実施していたが、浜鍋氏はそれを都が引き受け、代わりに汚染対策は総て東京ガスが行ない綺麗にするという費用分担をして、土地の売買契約を結ぶという条件を提示。同社も株主などを納得させられる条件と判断したのだった。

浜鍋…こうやって、2001年2月に覚書、7月に基本合意に至りました。佐藤さんへの働きかけにしても、費用分担にしても、株主対策など東京ガス側が民間企業として慎重な手順が必要だった。これが「水面下」の総てです。やましいことは全くありません。

こうして基本合意したところで土地交渉は浜鍋氏の手からは離れ、後

は知事本局で細かく詰めることになった。ところが、2005年に、浜鍋氏に反発する都庁幹部や都議会自民党により、議会介入問題をきっかけにして百条委員会にかけられ副知事辞任に追い込まれた。

豊洲問題に、再び不可解な動きが出始めたのは、浜鍋氏が都庁を去ったその後である。2008年、都の専門家会議が豊洲の東京ガス跡地を調査したところ、基準値の4万3000倍のベンゼンが検出されたのだ。ここからがまさに第3段階。東京ガスは、すでに汚染対策は講じた主張。そうした中で都はいつの間にかこの汚染対策費を捻出することに、2011年に正式に売買契約を済ませたのだ。

「私がいたら、ならなかった」

浜鍋氏は言う。
 「全くもって分からないのがそこです。私がいたら、こんなことにはならなかった。東京ガスが綺麗にしているから売買するということを決めていたのに、なぜそこをやらせずに都が汚染対策費まで出したのか。4万倍出た時点で、綺麗になるまで売買はストップするのが当たり前。つま

りそこに何か働いたということ。早く豊洲に移したい事情があったのか。どんな政治判断があったのか。そして誰かがその流れを作った。私が辞めた後は、知事本局がすっかり詰めていくことになっていったし、石原さんを囲んで、副知事や幹部や特別秘書たちがランチ・ミーティングでいろんなことを協議していた。そのメンバーに話を聞けば分かるはずです」

実は第1段階の証言者が最近になって出てきた。石原氏が知事に就任した1999年から2年間、中央卸売市場長を務めていた大矢實氏が、「面積やアクセスなど」豊洲に移転するしかないと最初は私が決めた」と一部メディアに語ったのだ。

大矢氏は「副知事や知事へ上げて、知事の決裁をもらった。(公議で)ベンゼンが出るだろうって話が確か出たが、それは封じ込めて充分対応できるといった話だった」としている。

第1段階の大矢氏の証言、そして第2段階の浜鍋氏の独白。豊洲問題はようやく全貌へ後一步だ。今後百条委員会や第3段階の関係者への徹底した事情聴取などで問題は全容解明へ大きく前へ進むことが期待される。